

令和6年度(2024年度) 学校評価総括表 【伊丹市立緑丘小学校】									
教育目標		人間性豊かな、たくましく生きるみどりの子の育成							
重点目標		①「確かな学力」を育むために ②「豊かな心」を育むために ③「健やかな体」を育むために ④安全で安心な学校づくり、環境整備 ⑤開かれた学校づくり ⑥教職員の働き方改革について ⑦「生徒指導体制」づくりのために							
主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価	
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	①・思考力・判断力・表現力の育成を図り達成感を味わい粘り強く学習できる力の育成 ・共に学び合う楽しさを感じさせる授業による学習意欲の向上 ・読書活動の充実	①・課題解決のために、対話の中で思考方法や表現方法を意識させる。 ・他者との対話を通して得られた考えをもとに、自分の考えを深めたり、広げたりする。 ・朝読書と図書時間を週1回設け、読んだ本は読書記録カードに記録する。 ・読書数に応じて、読書の木への掲示・読書カードへのシール貼り・もう一冊貸出券の配布を行う。 ・図書委員による読書の啓発をポスターや読み聞かせ、イベントなどを通して行う。	①・学年に応じた思考の方法を示す。話し合う目的や視点を明確にする。 ・話し合う目的や視点を明確にする。 ・理由・根拠を明確にして、自分の考えを相手に伝えようとする。 ・読書活動を充実させ、学校図書館開館期間中一人あたりの月平均貸出冊数が7冊を超えることを目指す。	B	①・話し合う目的や視点を明確にして話し合いをさせることができた。 ・学年に応じた思考の方法を明確に示すことができた。 ・児童学習アンケート「理由をはっきりさせて、自分の考えを伝えることができる。」の回答が、1・2年が93%、3・4年が87%、5・6年が82%で、昨年度(1・2年83%、3・4年83%、5・6年76%)よりも上がっている。 ・読書週間を実施することにより児童の本への関心が広まった。また、電子図書の開始により気軽に本に触れる機会を増やせた。 ・委員会と読書週間の日程が合わず、混乱を招いてしまったことが課題となった。行事予定をしっかりと確認して設定していく。 ・タブレットの充電がなく電子図書が見られない児童がいた。	①・思考方法や表現方法をさらに活用できるように研究していく。 ・児童の実態を把握し、学びを深めるための手立てを研究していく。 ・引き続き、理由・根拠を明確にして、考えをもたせる指導を進める。 ・行事と確認した上で委員会の後に読書週間がすぐるように設定する。 ・タブレットがないと一斉指導ができないのでタブレットを忘れないこと、充電をしっかりとしておくことを教員に周知してもらう。	・電子ツールを用いた「確かな学力の育成」は課題があるとのことなので、どのように活用していくのか、どんなときに活用するのかを考えてほしい。 ・今年度からタブレットで電子図書を見たり、借りたりできるようになったということで、さらに読書活動が充実したものになるよう願っている。
		②基礎・基本の確実な定着により自ら学ぶ意欲の向上 ・どの児童もわかる授業の創造 ③家庭学習の充実	②・ミニプリントの活用・少人数授業を実施し、基礎・基本の定着、学力の向上を図る。 ・課題を工夫したり、具体物を操作したり、表現方法を工夫したりする活動を取り入れる。 ③1・2年生は30分、3・4年生は60分、5・6年生は90分を目標とした家庭学習に取り組む。(学習塾や家庭教師なども含みます)	②・国語力の向上をめざし、「ことばの学習」の時間(3～6年生)を年間35時間実施する。 ・わかる授業づくりを工夫し、児童アンケートにおいて「授業は、わかりやすく楽しいですか。」の回答が90%以上をめざす。 ③児童アンケートにおいて、学年目標を達成した児童が80%以上になる。	②・ミニプリントや復習プリントを活用し、基礎・基本の力をつけることができた。タブレットでの課題を活用し、児童の実態に応じて取り組ませることができた。 ・児童アンケート「授業はわかりやすく楽しい」の回答が87.2%で、昨年度より評価が下がり、90%以上は達成できなかった。 ③・児童アンケート「家に帰ってから学習をしていますか。」(低30分、中60分、高90分)で、よくあてはまる(36.7%)、あてはまる(37.0%)で肯定的意見の合計は73.7%だった。<1～3年は87%、4～6年は61.2%> ・保護者アンケート「お子さんは家庭学習の習慣が身についていますか。」でよくあてはまる(18.3%)、あてはまる(46.1%)肯定的意見の合計は64.4%だった。 ・各学年の目標時間を、児童・保護者・教師で共通理解をしていく必要がある。	②・引き続き、ミニプリントや復習プリントの活用・少人数授業を実施する。タブレットでの課題にも継続して取り組ませる。 ・児童の実態を把握し、楽しみながら学ぶことのできる課題の工夫など、授業づくりの方法を研究していく。 ③・「あ・ろ・は」と同じく家庭学習の時間について啓発していく。 ・各学年の家庭学習の時間が、宿題も含め適切であるか、検討していく。	・家庭学習に関しては、90分できた、できなかったではなく、プラス評価となるような時間設定が良いのではないかと思う。子どもたちのモチベーションになるような仕組み(例：各学年の基準学習時間を上回ると評価される)が必要ではないか。		
	新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成 ②英語学習に対する興味関心や意欲の向上 ③授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進	①スクールタクトやミライシードなどの学習支援アプリやプログラミング教育、モラル教育について、研修を行っていく。 ②専科教員・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容などを積極的に行う。また、書く内容も取り入れ英語力の向上を図る。 ③ICT支援員と連携し、困ったことを聞きやすい環境をつくる。 ・ICT機器を整理し、使いやすい環境をつくる。	①プログラミング教育を各学年で実施する。 「学校やお家で、タブレットのルールを守って使っていますか。」で、肯定的な回答した割合が、85%を超える。 ②会話を取り入れた活動や、デジタル教材・ICTを活用することで、楽しんで意欲的に取り組むことができるようになる。 ③ICTを活用した業務の効率化や授業の効果的な活用が進む。	B	①・新教科書におけるプログラミング教育年間計画を作成した。また、職員に対して、プログラミング研修を実施し、プログラミング教育の周知を図った。 ・学校評価アンケートの「学校やお家で、タブレットのルールを守って使っていますか。」で、児童が肯定的な回答した割合が、92%となり、目標の85%を超えた。保護者も、昨年度72.6%に対し77.1%に向上した。しかし、両者の肯定的な回答をした割合には、差があるため、家庭での活用方法に課題があるといえる。 ②専科教員・ALT・JTEを活用し、学年ごとに、実態に応じた内容を取り入れた学習を行うことができた。高学年に関しては、既習事項を使ってコミュニケーションを取っていければと感じる。 ③まなびポケットの円滑な導入を行えた。ICT支援員の来校日を周知し、いつでも依頼ができる環境を作った。	①・本年度は算数を中心に、プログラミングの導入を行えたので、来年度は他教科にも拡充していきたい。また、家庭でのタブレットの使い方も含めて、情報モラル教育についても、研修会を開くなどしていく。 ②ICTを活用し、既習事項を復習できるような課題の配布を行い、学習の定着を図る。 ③まなびポケットについて、来年度から、新しく始まることが多くあることが予想される。その都度、周知や研修を行い、円滑に活用していけるようにしていく。	・授業参観をしたときに、タブレットを活用している場面をたくさん見させてもらった。参観しているときに、ある児童が違う画面を見ているときがあった。便利な反面、個別の内容までは把握できない道具なので、タブレットを使用するときとそうでない時のメリハリをつける工夫が必要だと感じた。	

学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	<p>「豊かな心」の育成</p> <p>① 道徳教育の推進 ② いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③ 不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④ 体験活動等の実施</p>	<p>① 命を大切に、思いやりに満ちた子の育成</p> <p>・基本的生活習慣の定着(生活指導の充実)</p> <p>② いじめへの対応</p> <p>・児童の問題行動への対応</p> <p>③ 不登校児童への支援体制の確立</p> <p>④ 校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動などの実施</p>	<p>① 道徳や人権の授業等を通じて、命やお互いを大切に相手を思いやることのできる子どもの育成を行う。</p> <p>・みどりっ子のきまりや月別生活目標、緑小しぐさ「あろは」の推進を図る。</p> <p>② 年2回、アンケート調査を実施し、教育相談を行う期間を設け、実態調査を行う。</p> <p>・事例に応じ、職員全体で共通理解し、対応する。</p> <p>③ 別室と不登校支援員を配置し、不登校児童に対応できるようにする。また、不登校児童への対応を職員全体で共通理解し、担任だけでなく組織的に取り組む。</p> <p>④ 教育課程に基づいた、遠足・社会見学等を計画し、子どもたちがさまざまな経験や集団活動ができる学習の場を設ける。</p>	<p>① 道徳、人権の授業後の感想で、自分を大切にしたり、相手の心情を考えたりする気持ちの深まりが見られる。</p> <p>・きまりを守り、児童アンケートにおいて、「月別生活を目標守って生活できている。」と回答した割合が80%以上になる。</p> <p>・緑小しぐさ「あろは」を意識して行動し、安全に生活できるようになる。</p> <p>② 学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を大切にすること。</p> <p>・児童の実態を話し合う場を月1回以上設定する。</p> <p>③ 不登校支援員の活用の幅を広げていく。</p> <p>・別室の実態を全職員に周知し、より活用できるように、環境整備に取り組んでいく。</p> <p>④ 現地で学ぶ校外学習や、外部の専門性の高い人材から学ぶ出前講座を計画し、実施する。</p>	B	<p>① 「自分には良いところがあると思いますか。」の結果は、78%と、前年度より高くなっているものの、他の項目に比べて低い結果となっている。そのため、自尊心を高める教育活動の推進を今後も行う必要がある。</p> <p>・児童アンケートの結果は、82%で当初の達成目標はクリアし、昨年度同様の結果が得られた。職員への周知も徹底することで意識して取り組む児童が多く見られた。一方、「あろは」を月別目標に組み入れたが、今一度今後の取り組みの改善が求められる。</p> <p>② 昨年度に引き続き、「初期対応 その日のうちに 報・連・相」の合い言葉をもとに対応することができた。だんだんと定着しており、早め早めの対応ができるようになり、場合によって、ミニケース会議を実施することでより組織的に対応することができた。</p> <p>③ 昨年度に引き続き、別室を活用して、不登校支援にあたった。別室を活用することで、教室以外に登校する場所、またはリラックスできる場所が確保され、登校する日が増えた児童も見られた。一方で、別室の使い方が自由になりすぎるあまり、別室を利用したい児童が使えなくなってしまう状況も見られた。</p> <p>④ 校外学習は計画通り実施できた。例年の出前講座(全学年で8つ)に加え、新たに「ミルク教室」「月や星」「ロープ講習」、緑ヶ丘公園を利用した季節に合わせた体験活動を実施することができた。</p>	<p>① 自己肯定感、自己有用感を高める教育活動の推進を引き続き行っていく。</p> <p>・教師自身も、リフレーミング練習(肯定的な言葉かけ)をしていき、児童の見本となるように心がける。</p> <p>・昨年度の反省から月別目標に「あろは」を多く組み入れ、さらに職員が意識できるように働きかけることが必要である。</p> <p>② 毎月行っている相談部の定例会での児童の様子の情報交換を今後も継続していく。また、必要に応じて、ミニケース会議を開き子どもへの関わり、事案への対応を検討していく。</p> <p>③ 別室の実態を全職員に周知していくとともに、使い方のルール作成や環境整備を進めていく。</p> <p>④ 年々、物価上昇やバス代の高騰が懸念されている。児童にとって有意義な遠足や社会見学、体験活動の精選、身近な地域資源を利用した活動を今後も検討していく。</p>	<p>・地域の方々が、別室の支援に入っているが、不登校児童に対して地域が他にできることがあればほしい。</p> <p>・みどりっ子食堂を集いの場にできるのではないかと学校よりも気軽に通える場が子ども食堂ではないのかと考えているので、いつでも声をかけてほしい。</p>
		<p>「健やかな体」の育成</p> <p>① 児童生徒の体力向上の促進 ② 魅力あるクラブ活動の推進 ③ 発達段階に応じた健全な食育の推進</p>	<p>① 健康な体づくり・体力向上</p> <p>② 同好の友だちとの自発的な活動を通じた、自分の趣味や特技のスキル向上</p> <p>③ 望ましい食習慣の推進</p>	<p>① 健康な状態で活動できるように、健康観察を行うとともに、健康を意識して生活できるように「ほけんだより」を用いた保健指導や、児童保健委員会による、保健広報活動を行う。</p> <p>・業間休みに多くの児童が外に出られるように、体育委員会を通じて、遊びの企画を行う。</p> <p>② 年5回、5、6年生を対象に行う。</p> <p>・自ら目標や内容を定める。</p> <p>③ 栄養教諭による「食の指導」を実施する。さらに、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。</p> <p>・食育だより(一言コメント)を掲示するなどして、活用する。</p> <p>・給食委員会による全校児童への広報活動を行う。</p>	<p>① 健康観察を毎日1回行う。</p> <p>・「ほけんだより」を用いて、保健指導を月1回実施する。</p> <p>・児童保健委員会にて年2回以上、健康な生活についての広報活動をする。</p> <p>・「休み時間、外で遊ぶ」とアンケートに答える児童が80%になる。</p> <p>② 目標に向け、活動を積極的に行う。</p> <p>③ 季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする。</p>	B	<p>① 健康観察を行っている割合が100%で健康に配慮して教育活動を行っている。ほけんだよりを用いての各クラスでの保健指導も93%されている。児童保健委員会は夏休みや冬休みの保健委員会だより、歯みがきカレンダーを作成し全児童へ配付した。また10月に、運動会練習時の水分補給や、怪我調べの結果を全校集会で児童へ発信した。</p> <p>・こおりおに大会や長縄大会、ドッジボール大会などの委員会企画を通じて、児童が業間休みに外で遊ぶ機会を作ることができた。しかし、児童アンケートの結果は70%と目標まで足りない結果となった。そのため、引き続き、児童が外に出て遊びたいようなきっかけ作りを考えていく必要がある。</p> <p>② それぞれのクラブで目標にむけて、積極的に取り組むことができた。</p> <p>③ 栄養教諭による「食の指導」を実施した。さらに、給食センターから送付される食に関する掲示物を、2階渡り廊下に掲示した。</p> <p>委員会の活動では、一言コメントの内容をポスターにした。各フロアの掲示板に掲示し、啓発した。また、食器の返し方や運び方を呼びかけるために立ち当番を行った。</p>	<p>① 引き続き、全職員が意識して児童の健康観察を行うことを心がける。ほけんだよりは配布時に担任と読み、書き込みをして持ち帰る形式を続けていく。</p> <p>・体育委員会での活動を通じて、児童が外遊びに興味を持つことができる企画を作っていく。また、クラスごとに行われている「みんな遊び」を取り入れることで、1年間通して、子どもたちが外で遊ぶことができる機会を増やしていきたい。</p> <p>② 引き続き、子どもたちから行いたいクラブ活動のアンケートをとり、自発的に活動できるクラブ活動の実施を行う。</p> <p>③ 季節の食材や栄養、給食に興味をもってもらえるように、給食委員会を中心に全校生に引き続き伝えていきたい。</p>	<p>緑丘小学校では、休み時間にクラス遊びの時間があるとのことで、コロナ禍で、なかなか関係を作れない児童や、外で思いっきり遊ぶ児童が少なくなってしまうことを考えると、クラス全員で遊ぶ機会を、外で遊ぶきっかけになるのではないかと</p> <p>栄養士が在籍している学校ということで、今後その良さを広げてほしい。今年度5年ぶりに保護者向けの試食会が好評だったとのことなので、給食のレシピ共有(レシピ動画など)など、今後も食習慣が良くなるよう取り組んでほしい。</p>

学校教育	<p>教育相談・支援体制の充実</p> <p>①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実</p>	<p>①自分らしさを発揮し、自ら学び、考え、行動できる児童の育成</p> <p>②児童・保護者の困り感に早期に寄り添うことのできるSC・SSW</p> <p>③支援の必要な児童のニーズの把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供</p>	<p>①・キャリア教育で目指す4つの資質能力についての系統性を明確にする。 ・各学年の教科などの年間計画に4つの資質能力について書き入れ、どの単元でどの能力の育成を目指すかを明確にする。 ・キャリアパスポートを活用し、振り返り、自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・キャリア教育が目指す4つの観点について児童自身の振り返りの場として、アンケートを行う。 ・昨年度のアンケート結果をもとに、評価の低かった「自己理解・自己管理能力」の学習を意識的に取り組む。</p> <p>②担任と保護者の面談等で、保護者のニーズを把握した上でSC・SSWへの相談を提案する。</p> <p>③・職員に相談機関を周知する。 ・保護者との連携を大切にして、必要に応じて面談を積極的に行う。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・特別支援教育支援員を配置し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・小中連携を行い、就学相談を行う。 ・必要に応じて、個別指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。 ・必要に応じて、総合教育センターと連携する。</p>	<p>①人間関係形成、社会形成能力・自己理解、自己管理能力・課題対応能力、キャリアプランニング能力の4つの重点的な資質能力について、各学年に応じた姿が見られる。(例) ・他者との関わりや自己理解について、教科や行事を通して学び、他者と協力して何かを行ったり、自分の良さについて知ったりすることができる。 ・自分の仕事に責任を持ちやり遂げようとする姿勢や課題を自分の力で解決しようとする姿勢を身につけたり、働くことの意味について考えたりすることができる。</p> <p>②職員会議で「児童の様子」を報告する際、関係機関との進捗状況を具体的に共有し、担任が早期に児童や保護者の困り感への対応方法を知る機会とする。</p> <p>③支援が必要な児童の実態の情報を校内で共有し、支援体制を整え、引き継ぐことで、児童の支援を充実させる。</p>	<p>B</p> <p>①低学年において昨年度のアンケートにおいて課題としていた「自分の考えを話すことができる。」「ルールを守ることができる。」の項目については、どちらも伸びが見られた。また、中学年においての課題であった自己理解・自己管理能力についても伸びが見られたが、依然として10%の児童が自己評価が低いため、これからも課題として取り組んでいかないとはいけない。最後に高学年だが、今年度も自己理解・自己管理能力の評価が低く、自らに成長を感じることができない児童も10%近くいる。こちらも継続して、課題として取り組んでいく必要があると考える。</p> <p>②生活指導担当が、「ミニケース会議を開く目安」を提示したことにより、ミニケース会議が開かれる回数が大幅に増え、25回をこえた。ミニケース会議では、児童・保護者の実態に応じた関係機関につなぐ手立てを検討し、終礼ファイルで報告するなど、組織的な対応ができた。課題としては、ミニケース会議の目安に達しているにもかかわらず、開催の検討がなされなかった事例があることである。</p> <p>③・年度初めに、職員に相談できる機関、流れなどを周知することによって、保護者からの相談に的確に答えることができた。 ・保護者からの相談・教師の気づきから、巡回相談にかかり、児童に合った学習方法・学習環境などを校内で整えることができた。 ・個別指導計画を作成し、次学年・進路先に引き継ぎを行った。</p>	<p>①これからも学級活動や道徳などの教材や活動を見直し、自己理解、自己管理能力を伸ばす学習を取り入れていく。人間関係形成・社会形成能力は自己評価が高いため、他者との良いところ見つけなどを取り入れ、他者から自分の良いところを覚えてもらうなどの活動を通して、自分の良さに目を向けさせる。また、教師も、児童一人ひとりの良さを見つけ、伝えていくことで自己理解を深めさせる。</p> <p>②「ミニケース会議を開く目安」に達しているにもかかわらず、「開催の検討がなされなかったのはなぜか」この課題から目をそらすず、検討を続け、組織的な対応ができる大切作りを行う。</p> <p>③引き続き、支援の流れや関係機関への情報を職員全体に共有できるように、研修に努めたい。 引き続き、児童一人ひとりに目を配り、児童の困り感に気づき、個に応じた学びの場を提供できるように校内の体制を整える。 ・引き続き、個別の指導計画を作成し、保護者や進学先と面談を通して児童の実態を伝えていく。</p>	<p>・情報共有の仕組みは、来年度も継続が必要。</p>
	<p>特別支援教育の推進</p> <p>①伊丹特別支援学校との連携 ②特別支援教育の充実</p>	<p>①支援の必要な児童のための指導内容・支援方法の相談</p> <p>②共に生き、共に学ぶことを通じた、違いを認め合う学級、学校の実現</p>	<p>①支援の必要な児童の困り感・手立て等を伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。</p> <p>②・交流学級を学校生活の基盤とする。 ・交流学級担任と特別支援学級担任が、連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・特別支援学級では、交流学級や地域での生活を豊かにすることができるように指導する。 ・子どもや保護者の願いを受けとめ、指導・支援する。 ・特別支援学級の子どもたちの理解を図るために、研修会を行う。</p>	<p>①支援が必要な子を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業作りを考える。</p> <p>②すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指す。</p>	<p>B</p> <p>①・アスパルの専門員や特別支援員に來校していただき、指導を受けた。授業の中でできる支援方法について教えていただいた。その後、教えてもらったことを学校全体に周知することで、直接指導を受けていない学級も学ぶことができた。 ・特別支援学級の研究授業において伊丹特別支援学校の専門の先生から指導を受け、専門的な視点から授業を改善していくことができた。</p> <p>②特別支援学級の参観や研修会を行うことによって、普通学級の担任も特別支援学級の子どもたちについて理解を深めることができた。また、研修会以外の場合でも、安全配慮が必要な児童について、共通理解を図ることができた。さらに、交流学級担任と特別支援学級担任が、日ごろから、連絡を密にし、意思疎通を図ることができた。</p>	<p>①引き続き、専門的な視点から意見をもらい、きめ細やかな支援の方法を考えていく。</p> <p>②今後も、保護者と連携を図りながら、すべての児童が、安心して過ごすことができる学級を目指していく。</p>	<p>・特別支援学級を望む保護者にはニーズに寄り添ったうえで、教員の見立てを提案できるように。何を大切に育ててこられたのかを確認することが必要。</p>
	<p>教職員の資質向上</p> <p>①研修等の充実</p>	<p>①授業力の向上と授業改善を目指した授業公開の実施</p>	<p>①『すすんで考え、表現する子をめざして～対話を通して、思考力・表現力を高める指導の工夫～』について職員で研究を深め、授業力の向上と授業改善を目指した授業公開を実施する。</p>	<p>①校内研究授業・事後研究会を年間7回行い、スキルアップ研修会(年間6回)、授業コンサルティングを実施し、授業力の向上を図る。</p>	<p>A</p> <p>①校内研究授業・事後研究会・市指定研究発表会、スキルアップ研修会を予定通り実施することができた。研究テーマの共通理解を図り、研究に取り組むことができた。</p>	<p>①児童の実態に応じた授業研究・授業改善を進め、きめ細やかな支援のあり方を考えていく。</p>	<p>・今後も研修体制の確率をお願いしたい。</p>

教育環境の整備・充実	<p>学校を支える組織体制の整備</p> <p>①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築</p>	<p>①学校運営協議会の活動の充実</p> <p>②学校情報の積極的な発信</p>	<p>①学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。</p> <p>②学校だより、学年だよりを月1回以上発行する。 ・学校ホームページを月10回以上更新することによって、学校情報を積極的に発信する。</p>	<p>①夏季職員研修に、学校運営協議会委員との交流会を設け、具体的な学校支援について協議し、実施につなげる。</p> <p>②保護者アンケートにおいて「学校だより・学年だより・学校ホームページ等により、学校の様子を知ることができる。」と回答した割合が90%以上になる。</p>	A	<p>①教員と学校運営協議会委員との合同で夏季研修会を開催した。学校の懸案事項について情報共有するとともに、教員が抱えている現場の課題や悩み等を交流し、学校運営協議会として可能な支援について協議した。</p> <p>②保護者アンケートのから、教育方針、行事、活動など学校の様子を知ることができていますかという質問に対し、よくあてはまるとあてはまらぬに記入した肯定的な割合が97%と、高い評価を得た。今後も、行事だけでなく、日常の様子をより発信していく。</p>	<p>①今後も年間計画に交流の場を位置づけ、学校運営協議会と教職員とが一体となって学校運営を押し進めていける体制を整えていく。</p> <p>②継続してホームページをアップしていけるよう、期日の設定や声かけを積極的に行う。行事があった際には、できるだけ当日にアップできるよう、声かけを行う。</p>	<p>・先生方の夏季研修会に運営協議会委員も参加し、合同で研修会を行うことができた。先生方と話す中で、どんな支援ができるかを考えられ、新たなボランティアが誕生したのは良かった。</p> <p>・保護者への学校情報の発信は、各家庭で、親子のコミュニケーションのきっかけとなるため、今後も積極的に発信をお願いしたい。</p>
	<p>安全・安心な教育環境の充実</p> <p>①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進</p>	<p>①防災、安全教育の充実</p> <p>②登校指導の実施</p> <p>③交通ルールの説明、自転車交通安全教室の実施</p> <p>④安全・安心な学校作り</p> <p>⑤教師としてのやりがい大切にされた業務改善の実施</p>	<p>①火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施し、事後指導で、身の守り方を再度確認する。</p> <p>②毎学期始め、校区の危険箇所立ち児童の登校している様子を確認する。</p> <p>③警察の方に、交通ルールのことや、自転車の乗り方など指導してもらい、長期休み前などに、再度学級でも指導する。</p> <p>④安全点検を月1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。</p> <p>⑤夏季研修で業務改善にかかる研修をワークショップ型で実施する。</p>	<p>①さまざま場面の避難訓練を計画することで、児童がより迅速かつ安全に避難でき、身の守り方について学ぶことができる。</p> <p>②危険な場所や、登校の仕方などで気になることはすぐに対応し、全児童にも指導することができる。安全に登校する児童が増える。</p> <p>③交通ルールや自転車のルールを守る児童が増える。</p> <p>④安全点検をもとに、安全に過ごす環境を整えることで、問題のある場所がなくなる。</p> <p>⑤職員の発案による業務改善を組織的に行い実現する。</p>	B	<p>①今年度は、火災、防犯、地震の避難訓練を行った。避難経路や避難の仕方、身の守り方について考えることができた。</p> <p>②安全に登校する児童は増えている。車や自転車が通る場所や信号がない場所などが校区にはあるので見守りが必要などところが多い。今後も指導していく必要がある。</p> <p>③長期の休み前に学級指導で交通ルールなどの指導をすることで、児童への啓発ができた。</p> <p>④安全点検の結果、学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行うことができた。</p> <p>⑤【教師としてのやりがい】を語り合った上で、業務改善のアイデアを出し合うことができた。また、【地域に支援してもらいたいこと】という項目を立て、職員のニーズに応じた地域支援につなげることができた。</p>	<p>①児童がいざというときに自分で身を守るように、避難訓練の仕方や形態について、見直し、改善を行っていく。子どもや保護者にも防災の意識を持ってもらえるように、毎年ランドセルに避難場所等が書かれたカードを入れるようにする。</p> <p>②危険な箇所などは、すぐに見に行き、児童にすぐ指導を入れるようにする。</p> <p>③引き続き指導と啓発をしていく。</p> <p>④引き続き学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行う。</p> <p>⑤学校運営協議会の委員と職員との意見交流会で、職員がのやりがいとともに、困り感や地域に支援してもらいたいことを直接伝えることで、地域支援の【起点】にする。</p>	<p>・登校指導をしていると、ルールを守った自転車の乗り方ができていない人が多いと感じる。自治会でも自転車教室を行っているが、学校でも保護者も含めた自転車交通安全を考えていきたい。子どもの見本になるような大人の行動が必要。</p> <p>・教職員と意見交流ができ、先生方が何に困っているのかがわかった。働き方改革の一助になればと考えたい。</p>

学校関係者評価総括

- ・教職員と運営協議会委員の合同研修会によって、直接の声を聞くことができた。その話し合いから、地域が手伝えることが増えた。
- ・今年度、学校運営協議会の話し合いから、地域の方々が学校に入り込む機会が増え、それぞれの活動により、学校に協力できているのではないかと思います。
- ・昨年度と比べると「A」の評価が増えており、「B」から「A」にするための、教職員の日々の努力があつてのことだと思ふ。今後もさらに良いものにしていってほしい。

次年度に向けた重点的な改善点

- ・教職員と直接会って、話を聞くことの重要性を感じた。これからも話し合いを続けられる体制を維持していく。
- ・不登校支援をさらに進められるよう、地域との協力体制を構築していく。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った